

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 6 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530588

研究課題名（和文） 高齢者虐待に関する支援方法の研究

研究課題名（英文） Research of Elder Abuse Intervention Approach

## 研究代表者

副田 あけみ（SOEDA AKEMI）

関東学院大学・文学部・教授

研究者番号：60154697

研究成果の概要（和文）：居宅における高齢者虐待の中でも、特に介入を拒否しがちな虐待者に対する有効な介入アプローチを開発することが目的である。M-D&D（修正版デザイン・アンド・ディベロップメント）に従って、「安心づくり安全探しアプローチ（AAA）」をデザインし、その有用性を評価した結果、質問紙調査によってAAAが援助職の対処可能感の改善を、また、事例調査によって援助職と虐待者との関係性、および虐待者の状況変化への動機づけの改善をもたらすことが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the research is a development of an effective intervention approach for elder abuse at home, when the perpetrator tends to refuse a professional intervention. On the basis of M-D&D; Modified Design and Development, we designed AAA(jap. Ansindukuri Anzensagasi Approach) which in English means 'Security and Safety Approach'. According to the results of the questionnaire, AAA leads to the improvement of the social worker's coping-efficacy. Furthermore, the results of the case study showed that AAA leads to the improvement in the relationship between the perpetrator and the social worker as well as the improvement in the perpetrator's motivation to change.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者虐待、介入アプローチ、実践モデル、介入研究、M-D&amp;D（修正版デザイン・アンド・ディベロップメント）、

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 援助職の「困難感」

2000年の公的介護保険の実施は、介護負担の軽減による虐待予防という効果をもたらしたと推測できる。だが同時に、居宅サービスの増加や、介護支援専門員による家庭訪問の実施によって、虐待発見の機会が増えるこ

とになった。

こうしたなかで、全国規模の『家庭内における高齢者虐待に関する調査』（財団法人医療経済研究機構、2004年）が行われた。この調査は、もっとも多い虐待者は息子であり、未婚者であることを明らかにした。同時に、虐待事例に対応している介護支援専門員等

の 88%のものが、虐待事例に対して「困難」を感じていることを指摘した。

また、2006 年度から創設されることになった地域包括支援センター職員を対象とした調査（藤江慎二「高齢者虐待の対応に困難を感じる援助者の認識」2009 年）でも、対象者たちの 91%が虐待対応に困難を感じていた。「困難」を感じる理由としてあげられていたのは、両調査とも、「虐待者が介入を拒むこと」、「虐待の認識がないこと」、「自分たちの技術が未熟であること」であった。

虐待事例があきらかに緊急事態にある場合、虐待者の意向は無視してでも、被害高齢者を一時的に保護救済することはある。だが、被害者である高齢者自身が自宅に戻ることを切に望む場合も少なくない。また、その後、施設入所の対応をとるにしても、虐待者と話し合う必要がある。そうであるならば、初めから虐待者と話し合える関係を作っておく必要がある。

緊急事態かどうかまだよくわからないという場合には、当事者、特に、虐待者との話し合いを試みなければ、その状態やニーズをていねいに把握することができず、被害者である高齢者の保護や在宅での支援も的確にできなくなるおそれがある。

ところが、援助職が支援の困難を感じ続ければ、回避感情が生じて、虐待の当事者たち（被害者、虐待者）とうまく話し合いの関係を作ることができなくなる。結果的に、状態やニーズ把握の遅れや、当事者たちの心理や意向を考慮に入れない支援が生じかねなくなる。こうしたことは、当事者、特に虐待者の、援助職および援助機関にかんする不信感や不満を高め、支援をいっそう拒否するといった悪循環を強めかねない。

## (2) 新しい介入アプローチの必要性

2005 年に成立した高齢者虐待の防止、高齢者の養護者の支援に関する法（通称、高齢者虐待防止法）に基づき、各自治体では、専門職や民生委員、地域住民への啓発事業が実施されており、制定以降、全国の相談通報件数は毎年度増加している。特に、息子による虐待、未婚子による虐待、身体的虐待の増加傾向が目立っている。この傾向は、援助職が「困難」を感じる事例の増加を示唆している。

援助職が強い「困難感」をもち、介入技術の未熟さをなげくのではなく、彼らがなんとか対処できるという「対処可能感」（「問題になんとか対処できる」、「問題に対して何もできないわけではない」という感覚）を回復すること。そして、介入を拒んだり、虐待の認識をもっていない、つまり、状況について変化の必要性を感じていない、あるいはそれを否定しているような虐待者と話し合える関係を早期に作り、虐待者と解決に向けての話

し合いを行っていくこと。こうしたことによって、先に述べた援助職と虐待者との悪循環を変化させることが、虐待の当事者たちへの支援のために、すなわち、虐待の悪化防止のために早急に求められている。

しかし、虐待事例に対する援助職の「対処可能感」を向上させ、関係づくりに貢献するような介入モデルは、高齢者虐待に関する既存文献レビューによっては見いだせなかった。そこで、新しい介入モデルを開発し、その有用性を評価することにした。

## 2. 研究の目的

研究の目的は、高齢者虐待事例に対する新しい介入アプローチを開発することである。

より詳しくいえば、高齢者虐待事例でも、特に援助職が介入困難と感じる、虐待を認めない、あるいは、かかわりや支援を拒否する傾向をもつ家族虐待者へのコミュニケーションの仕方に焦点を当て、援助職の「対処可能感」の回復・促進と、援助職と虐待者との話し合える関係性の形成を通じた虐待者の状況変化への動機づけの促進を目指した介入アプローチをデザインし、そのアプローチの有用性を評価することである。

## 3. 研究の方法

新しい介入アプローチの開発にあたっては、M-D&D（修正版デザイン・アンド・ディベロップメント）の考え方と方法に沿って実施した。M-D&D は、(1)問題把握と分析、(2)たたき台のデザイン、(3)試行と改良、(4)普及とあつらえ、という位相から成る。

### (1) 問題把握と分析

新しい介入アプローチに対するニーズを既存の調査データを用いて確認するとともに、既存文献レビューにより、こうした介入アプローチが見当たらないことを確認した。

高齢者虐待については事例への介入モデル自体が少ない。虐待に対する実践モデルまで広げてみると、成人保護サービスモデル、DV モデル、修復的司法アプローチ、犠牲者アドボカシー・モデル、無効化モデル、保健モデル、家族介護者支援モデル、家族保全モデル等がある（Nerenberg, L, 2008）。だが、これらは、援助職の「対処可能感」の回復・向上や、虐待者の状況変化への意欲や動機づけに焦点を当てたものではない。

### (2) たたき台のデザイン

#### ① 参考モデル

参考になりそうなモデルとして、加害への取り組みモデルと児童虐待への介入アプローチについて検討した。前者の Good Life Model（生きがいモデル）は、クライアントの犯罪誘因的ニーズは何かという問いによって臨床的課題を発見するところから始ま

る。その課題について話し合い、変化への動機づけをもたらすというカウンセリング・モデルである（中村正、2010年）。これは虐待者の変化への動機づけにも役立つと考えられるモデルではある。だが、このモデルは、逸脱行動を認めカウンセリングの場に登場している加害者を対象としている。新しいアプローチが前提としている対象者とは異なる。

児童虐待への介入アプローチである安全サインアプローチ（サインズ・オブ・セイフティ・アプローチ）は、ブリーフセラピーの基本的な考え方に基づいて、虐待する家族との協力関係を、「例外」探しやストレンクス（強み）・資源の発見とそれに対する肯定的なフィードバック、家族自身によるゴール＝解決像（家族を動機づけるもの）の構築といった具体的な方法によって作っていく方法である。

ストレンクス視点に立ったコミュニケーションの具体的なスキルを提示しているこの方法は、高齢者虐待事例を前に、自分の技術不足を感じている援助職にとって、その対処可能感を回復・促進するのに役立つ方法であり、虐待する家族との援助関係形成に役立つものと考えられた。

#### ②たたき台の作成

安全サインアプローチの創始者である Turnell, A. らのワークショップや、安全サインアプローチが理論的基盤としている解決志向アプローチのワークショップに参加しながら、解決志向アプローチと安全サインアプローチに基づく、高齢者虐待事例への新しい介入アプローチの方針とプロセス、各プロセスで用いる技法を整理した。

虐待事例に携わっている地域包括支援センター職員と行政職員3名へのヒアリングを行い、方針やプロセス、技法等の妥当性を確かめながら、各プロセスで用いる5つのツール（危害リスク確認シート、安全探しシート、安心づくりシート、プランニングシート話し合い用、プランニングシート機関用）を作成した。また、1つの既存のシート（タイムシート；生活時間様式研究会代表公林良二）を代表者の承諾を得て使用させてもらうことにした。

これらのツールを活用しながら虐待者とのコミュニケーションを進めていく新しいアプローチを、「安心づくり安全探しアプローチ（AAA）」と呼び、AAAの実施可能性や有用性を検証するため、地域包括支援センターや行政機関の職員、また、介護支援専門員等を対象とした、研修を実施することにした。実施にあたって作成した研修プログラムは、講義だけではなくエクササイズやディスカ

ッション、ロールプレイを多く取り入れている。能動的、積極的に参加できるようにという意図からである。エクササイズでは、援助職による問いかけや応答の仕方が当事者たちの気持ちにどのような影響を与えるのか実感してもらうために、研修参加者自身がクライアントになって質問を受けるという、内容の工夫を行った。

(3)試行と改良、および、(4)普及とあつらえ、については、次の4. 研究成果、で報告する。

## 4. 研究成果

### (1)試行と改良

#### ①試行；研修の実施

研修は、関東、北陸の9の自治体で実施した。研修参加者は、全体で595名（研修で質問紙調査に回答した者の数）を超える。

研修が終了するごとに、研修内容等について振り返りを行ったが、全般的に参加者の満足度は高く、AAAの基本的な考え方や技法そのものについては変更を行っていない。ただし、参加者の要望等を反映させ、5点ほど改良を施した。1)エピソードシート（タイムシートをシンプルにしたもので、特定のエピソードに焦点を当てて使用するもの）を作成した。2)安心づくりシートを改定した（シートの活用法がわかりやすくなるように改定）。3)多職種によるケースカンファレンス様式を新たに作成した。4)研修プログラムに「理解のすり合わせ」を追加した。5)研修を基礎編と応用編に分け、応用編で用いる模擬事例を作成して、これにもとづいたロールプレイ中心の研修を実施した。

#### ②有用性評価の方法

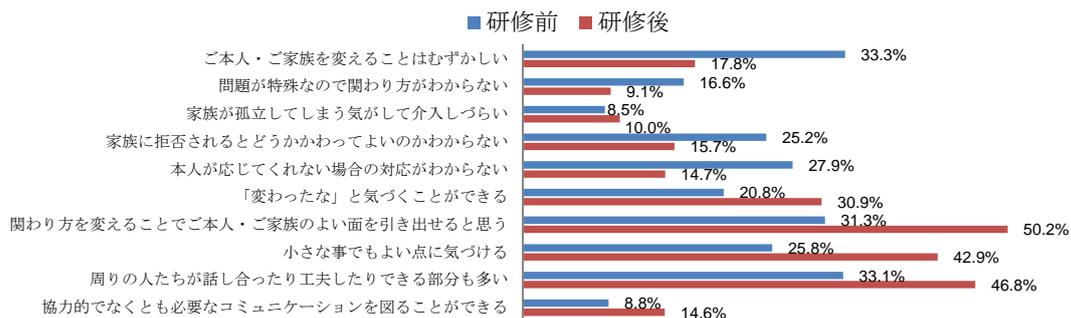
本アプローチの有用性を評価するにあたり、研修前（T1）、研修後（T2）、研修3か月後（T3）の3時点で、無記名自己記入式質問紙法による調査を、また、研修参加者のなかから協力者を得て事例調査（援助者記入式調査、ヒアリング調査）を実施した。

T1, T2, T3時調査は、2009年4月～2011年3月の間、順次実施した。事例調査のうち援助者記入式調査は2010年9月～2011年3月、ヒアリング調査は2011年3月に実施した。

質問紙法の調査項目は、T1時；所属機関、経験年数、虐待対応経験の有無、所持資格、対処可能感、T2時；AAAの基本的な考え方についての理解度、研修の満足度、対処可能感、T3時；T1時とT2時の項目に加えて、AAAのシート利用状況と利用していない場合の理由、である。

T1とT2の比較により、研修による直接的・短期的効果を、T3時の調査で研修の長期的効果に影響を与える要因の把握を目指した。

対処可能感10項目の変化（各項目に「そう感じる」と答えた割合）



図表 1 研修による直接的・短期的効果

対処可能感は、「高齢者虐待という困難事例に対して、何か対処できることがあると感じる効力期待」として位置付け、既存の対処可能感に関する先行研究とたたき台作成の際に実施した実践家へのヒアリング調査結果等をもとに尺度を開発した。

本尺度の信頼性と妥当性については、T1 時の質問紙調査のうちの 321 名分をもとに検証した。因子分析（主因子法バリマックス回転）の結果、1 因子「対処困難意識の低さ」と第 2 因子「対処の工夫や気づきの高さ」とは、対処可能感に関する先行研究で明らかになっている結果とおおむね一致するものであり、構成概念として妥当なものであると判断した。

また、信頼性の指標として、内の一貫性の指標である Cronbach's  $\alpha$  係数を算出したところ、全項目  $\alpha = .74$ 、第 1 因子  $\alpha = .74$ 、第 2 因子  $\alpha = .77$  と比較的高い一貫性が示され、項目内容の一定の信頼性が指示された。

事例調査のうち援助者記入式調査は、実際の虐待事例に対する AAA による介入が、a 虐待する家族との関係性、b 虐待する家族の状況変化への気持ち・意欲（動機づけ）、c 当該事例への援助職の対処可能感、の改善に効果をもたらしているかどうかを確認することを目的としている。また、a の変化は b の変化をもたらすのか、a と c、b と c の変化は関係しているのか、という点も明らかにすることを目的としている。

援助者記入式調査は、虐待する家族との毎回の面接終了後に経過記録シートを記入してもらうというもので、調査期間中に実施した面接すべてについて記入を求めた。

経過記録シートの項目；面接において実施した AAA の基本的対応、話のなかで取り上げた項目（安心づくりシートで話し合う項目）、発見できたストレングス・資源、虐待する家族との話し合える関係性/虐待する家族の状況変化についての気持ち・意欲/本事例に対する対処可能感、の 3 つについての自己評価（スケールリング）。なお、この経過記録シートは、ストレングス・資源の記述欄以外はいずれの質問項目においても、回答欄の数字に

○印をつけるだけですむもので、プライバシー保護に最大限配慮した。

事例調査のうちのヒアリング調査は、経過記録シートで確認できた変化や経過記録シートの課題等を確認する目的で、経過記録シートを記入した地域包括支援センター職員 3 人に、1 時間～1 時間半ほどの半構造化面接法で実施した。

以上の調査についてはいずれも首都大学東京研究安全倫理委員会の承認を得ている。

### ③有用性検証の結果 1；研修による直接的・短期的効果

AAA による研修参加者で T1 の質問紙調査に回答した者は総計 595 名であったが、対処可能感の妥当性、信頼性を検証した 10 項目バージョンの質問紙調査に回答した者（かつ、T2 の質問紙調査にも回答した者）は、311 名であった。対象可能感の各項目に関する T1 と T2 の変化は図表 1 のとおりである。

1, 2, 3, 4 のリッカートスケール（上位 5 項目が逆転項目）にそれぞれ 1～4 点の得点を与えて合計得点を算出したところ、T1 時では 25.9 (S.D. = 3.7)、T2 時では 28.0 (S.D. = 3.6) であり、この変化には有意差が見られた。ただし、所属組織や職種、虐待事例対応経験数等では有意差が見られなかった。

AAA による高齢者虐待防止研修が、援助職の対処可能感を改善する効果が示された。

### ④有用性検証の結果 2；研修の長期的効果に影響を与える要因

T3 時の質問紙調査は、研修参加者のうち、T2 時の質問紙調査に AAA の各シートを活用したいと連絡先を記述した者に、郵送調査を行い、78 名から回答を得た（回収率 45.1%）。

回答者全体の対処可能感の中央値は 26.0 であった。これは研修前の T1 時の中央値 25.9 に近く、研修後 T2 時の中央値 28.0 より低い。26.0 をカットオフ点として、研修で高まった対処可能感が維持された群（維持群）と、低下した群（低下群）に分け、両者の特徴を比較することを通して、研修で高まった対処可能感の維持に影響を与える要因が何かを探

った。

その結果、Fisher の直接確率検定により、「経験年数」(4年以上)、「安心づくりシートの活用」、「プランニングシートの活用」、「AAAの基本的な考え方のうちの、特にストレス視点に立ち当事者家族の体験の理解に努めること」が、「維持群」と有意に関連していることが明らかとなった。つまり、経験年数が4年以上あり、ストレス視点に立った当事者家族の体験理解に努めることを意識し、安心づくりシートやプランニングシートを活用していることが、研修で高まった対処可能感の維持に影響を与えているということである。

このうちもっとも影響する要因が何かを明らかにするため、対象可能感総得点を従属変数とした重回帰分析を実施した結果、もっとも強い正の影響力を持つのが「安心づくりシートの活用」であり(.661)、ついで「経験年数」(.256)であった。経験年数が長くなることは、高齢者家族支援のスキルの向上につながり、AAAで提示している基本的な考え方の応用力が高くなる。また、安心づくりシートを用いた面接ができれば、問題が語られた後に例外や強みを確認し合うという重要な対話が可能になる。こうしたことが、高まった対処可能感の維持に貢献していると考えられる。

以上の結果は、研修プログラムの構成や研修後のフォローアップ方法の検討に役立てることができる。

なお、対処可能感を構成する下位因子についても同様の検討を加えた結果、「危害リスク確認シートの活用」は、「対処の工夫や気づき」と負の関連が見られた。このことから、「危害リスク確認シート」のようなリスクアセスメントを中心としたツールの活用だけでは、対処可能感を低めるおそれがあることも示唆された。

#### ⑤有用性検証の結果3；虐待事例に対するAAAの効果

AAAの研修参加者のうち、調査主旨を理解し調査協力の同意書を記述してくれたのは、地域包括支援センター職員(21名)と行政職員(6名)の計27名である。そのうち、経過記録シートを調査期間中に1枚以上記入し提出したのは13人であった。ただし、同一事例を複数で交代しながら記録していた例もあり、分析対象とした事例数は11(うち1事例は同じ家族で虐待者が夫と息子の2人。担当援助職はそれぞれ別)である。

いずれの事例においても担当援助職は、AAAによる面接の基本項目を総じてよく実施しており、高齢者や虐待者の、また、家族全体のストレス・資源をできるだけ幅広く見出そうと努力していた。ただし、「安心づ

くり面接」の項目のうち、「心配なことが起こりやすいパターン」の確認と「例外」探しは半数以下の事例での実施にとどまっていた。

スケーリング結果の分析方法は、a 虐待する家族との関係性、b 虐待する家族の状況変化への動機づけ、の面接ごとの点数が、介入期間の間にどのように変化したのかそのパターンを分類するという方法をとった。c 当該事例への援助職の対処可能感、については、質問文の意図が協力者に十分伝わらなかったため、記載されていない部分も少なからずあった。そこで、今回は分析から除外した。また、11事例のうち、3事例は面接回数が1回と少なかつたため(調査後、介護支援専門員による見守りとなった事例)、分析から除外した。

a 虐待する家族との関係性の変化のパターンは、8事例のうち5事例までが(ア)直線的改善パターン、3事例が(イ)V字型改善パターンを示した。b 虐待する家族の状況変化への動機づけの変化パターンは、8事例のうち4事例が(ア)直線的改善パターン、3事例が(イ)V字型改善パターン、1事例が(ロ)直線的悪化パターンであった。また、aとbの変化パターンの関係をみると、5事例までが同じ変化パターンであった。

これら結果は、AAAが虐待する家族と援助職の話し合える関係づくりと、虐待する家族の変化への動機づけ改善に効果のある介入アプローチであることを示唆している。また、虐待者との関係性の構築・改善が、虐待する家族の変化への動機づけに効果的な影響を与えうることを示唆している。ただし、さらに事例数を増やして検証する必要がある。

#### ⑥結論

AAAによる虐待防止研修における質問紙調査の結果と、事例調査における経過記録シート分析の結果から、AAAは地域包括支援センター職員らソーシャルワーカーの対処可能感を改善する可能性が、また、AAAは、虐待する家族と援助職との関係性と、虐待する家族の状況変化への動機づけの改善をもたらす可能性とが示された。以上のことから、AAAは、虐待事例への介入アプローチとして有用性をもつアプローチと言える。

#### (2)普及とあつらえ

M-D&Dの最後のフェーズは、より広い範囲で本アプローチが活用されるよう、その普及を図ることである。

私たちは2年間にワークショップを含め7回の学会発表を行い、研究者や実践家、また、相談機関等の管理職に本アプローチを広めるよう努力した。さらに、本研究に関する図書1冊と、実践家向けの本アプローチに関す

るガイドブックを刊行する。このガイドブックは、研修プログラムに沿ったものになっているので、AAA を実践しているソーシャルワーカーがこれをもとに研修講師を務めることが可能である。

AAA が実践現場で理解され広く活用されていくためには、AAA を活用するソーシャルワーカーだけでなく、その同僚や上司、他機関の多職種にも AAA の基本的考え方や方法を理解してもらう必要がある。そのために、AAA によるケースカンファレンスの方式等を活用した多職種協働の方法を今後開発していく予定である。

#### 引用・参考文献

藤江慎二 (2009) 「高齢者虐待の対応に困難を感じる援助者の認識」 高齢者虐待防止研究 5(1)

中村正 (2010) 逸脱行動と社会臨床—加害に対応する対人援助学、望月昭・サトウタツヤ・中村正編、『対人援助学の可能性——「助ける科学」の創造と展開』、福村出版

Nerenberg, L (2008) Elder Abuse Prevention: Emerging Trends and Promising Strategies, Springer Publishing Company

Turnell, A. & Edwards, S. (1999=2007) 白木孝司他訳『安全のサインを求めて』、金剛出版

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 副田あけみ・土屋典子 「高齢者虐待防止のための実践アプローチ開発」 高齢者虐待防止研究 7(1)、査読有、2011、pp. 115-123

② 副田あけみ・長沼葉月・土屋典子 『虐待ケース』を早期解決に導く安心づくり安全探しアプローチ」月刊ケアマネジメント、査読無、2010年7月号、pp. 32-37

[学会発表] (計 7 件)

① Akemi Soeda, Hanae Kanno, Hazuki Naganuma, “ Elder Abuse in Japan: An Innovative Approach to Prevention and Evaluation”, presented at the 2012 Annual Conference of American Society on Aging, 査読有、2012年3月29日、Marriott Hotel (Washington DC)

② 副田あけみ・長沼葉月・坂本陽亮・土屋典子 「高齢者虐待防止のための実践アプローチ開発—『安心づくり・安全探しアプローチ (AAA)』による援助職の対処可能感向上の効果—」口頭報告、査読有、日本高齢者虐待防止学会第8回大会、2011年7月30日、茨城県民文化センター (茨城)

③ Akemi Soeda, Hazuki Naganuma. Nobuyuki

Iwama, Hiromichi Arai, “ An Intervention Approach into Elder Abuse” presented at the invited Symposium of the 21th Asia-Pacific Social Work Conference 査読有、2011年7月17日、早稲田大学 (Tokyo)

④ 長沼葉月・副田あけみ・土屋典子・坂本陽亮 「高齢者虐待事例への援助職の対処可能感に関して—所属機関・経験年数・虐待対応経験からみた検討—」口頭発表、日本ソーシャルワーク学会第28回大会、査読有、2011年7月3日、川崎医療大学 (岡山市)

⑤ 長沼葉月・副田あけみ 「安心づくり安全探しアプローチによる高齢者虐待防止」、ワークショップ、日本ソーシャルワーク学会第28回大会、査読無、2011年7月1日、川崎医療大学 (岡山市)

⑥ 長沼葉月 「解決志向アプローチの発想を組み込んだ高齢者虐待事例への支援方法の開発」日本ブリーフセラピー学会第20回大会、2010年8月28日、長崎総合福祉センター (長崎市)

⑦ 副田あけみ・土屋典子 「高齢者虐待防止のための実践アプローチの開発—「安心づくり・安全探しアプローチ (AAA)」開発の方法と過程—」、ポスター発表、査読有、日本高齢者虐待防止学会第7回大会、2010年7月3日、広島市南区民文化センター (広島市)

[図書] (計 2 件)

① 副田あけみ 編 『高齢者虐待への介入アプローチ開発』環境新聞社、2012年8月刊行予定、pp. 1-192、(執筆者；副田あけみ・土屋典子・長沼葉月・坂本陽亮)

② 副田あけみ・長沼葉月・土屋典子 『高齢者虐待防止のための家族支援—安心づくり・安全探し・アプローチ (AAA)』誠信書房、2012年7月刊行予定、pp. 1-160.

[その他]

<http://www.elderabuse-aaa.com/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

副田 あけみ (SOEDA AKEMI)  
関東学院大学・文学部・教授  
研究者番号：60154697

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

長沼 葉月 (NAGANUMA HAZUKI)  
首都大学東京・都市教養学部・准教授  
研究者番号：90423821  
土屋 典子 (TUCHIYA NORIKO)  
立正大学・社会福祉学部・講師  
研究者番号：60523131